優秀賞

『こころ』

夏目漱石 作、岩波書店、2002.

水本　大成（文学部　歴史学科　3 年）

人は誰しも、言葉にできない孤独や後悔を抱えているものです。そんな「心の秘密」を、あなたは直視したことがありますか？ 夏目漱石の『こころ』は、あなたの内面をそっと照らし出し、自分でも気づかなかった感情に触れるきっかけをくれる作品です。

この小説が描くのは、ただの人間関係の物語ではありません。「先生」と「私」の交流を通じて、漱石は私たちが目を背けがちな「人間の本質」に残酷なまでに鋭く切り込んでいきます。孤独、罪悪感、信頼の揺らぎ。誰もが抱く心の闇を、漱石は静かに、しかし確実に炙り出しているのです。

「人を愛するとはどういうことか」「信頼を裏切られたらどうするか」。登場人物の葛藤は、100 年以上前に書かれたとは思えないほど現代的で、私たちの日常にも重なります。ページをめくるたびに、自分の心が揺さぶられ、「もし自分だったら……」と考えずにはいられない。だからこそ、『こころ』は読む人それぞれに異なる「答え」を提示する、不思議な魅力を持っています。

そして、漱石の言葉の一つ一つが、まるで鋭いナイフのように心に突き刺さります。例えば、先生の孤独な告白は、己に抱える矛盾への苦悩として、現代人のジレンマを見事に言い当てています。作品を読み終えたとき、あなたは先生の苦悩を通じて、自分の「こころ」の奥底に隠れていた感情に気づくでしょう。

また、『こころ』の魅力は、単なる感情移入にとどまりません。読み進めるほどに、「人間とは何か」という哲学的な問いに直面し、自分自身と向き合う旅が始まるのです。その過程は、決して楽ではないかもしれません。しかし、心の奥深くに潜む己を知ったとき、あなたの人生観はきっと変わるでしょう。

『こころ』は、読む者に深い余韻と問いを残す作品です。表面的なストーリーを追うだけではなく、心の奥に潜む「本当の自分」と向き合うきっかけをくれる、そんな一冊なのです。漱石が描いた、まぶしいほどの「心の闇」に飛び込んでみませんか？ その先にはきっと新しい「あなた自身」が待っています。